

日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ
博多の歴女 白駒妃登美

昭和四十八〜五十年にかけて放送されたNHK『新八犬伝』という番組をご存じでしょうか。江戸時代のベストセラー『南総里見八犬伝』が原作の人情劇で、平均視聴率二〇パーセントの人気番組でした。祖母の影響か、こういう時代ものが好きな私は、毎回欠かさず見ていました。足かけ三年に及ぶ放送が終了すると知った時、あまりに残念で、どうか終わらせないでくださいと、小学生の拙い字でNHKに手紙を送ったことを覚えています(笑)。

その原作『南総里見八犬伝』という全九十八巻の超大作を著したのが、曲亭馬琴。実は彼、日本初のプロ作家なんです。江戸後期に活躍した彼は、本名は滝沢馬琴とい

❖終わらせないで❖

曲亭馬琴に仕えた・滝沢路

名作に隠された悲痛の努力

「くるわ・で・ま・こと」という意味で、遊びの場所(廓)で遊女に誠を尽くしてしまふような野暮な男でございます、というのが由来です。なんだか自嘲的というか、ちよつとインテリを気取った感じで、あまり友達にはなりたくないような……(笑)。

そんな彼も、晩年は視力の衰えに苦しみます。窮地に陥った馬琴の目となり、手足となつて代筆を担ったのが、滝沢路でした。

❖滝沢家当主の母親として

路は二十二歳の時、馬琴の息子と結婚。一男二女に恵まれ、五大家族で平穩に暮らしていました。ところが、十年足らずで夫に先立たれるんですね。そこから路は義父母と同居を始めます。当時の庶民の社会通念では、夫と死別した場合、お嫁さんは子



滝沢路 江戸城に勤めたのち、22歳で曲亭馬琴の子・滝沢宗伯興継と結婚。一男二女。30歳(1806-1858)で夫を亡くし、義父母と同居を始める。34歳から義父・馬琴の代筆を始める。

【イメージイラスト】
アオジマイコ